〔資　料〕

清言小品『小窓幽記』解読
——「素」「豪」「奇」の部から——

郭　莉莉

人々を警(いまし)めるための格言が収録された『小窓幽記』(1) は，陳継儒（1558～1639）によって編纂され，出版当時，文人ならびに一般の人々に歓迎され好評を博した。陳継儒は明代晩期に詩や文の創作で活躍した文人であるが，同時に秀でた書家・画家でもあった。多芸多才な陳継儒は朝廷にいる他の文人たちに尊敬され，何度も政治に参加するように薦められながらも，自由でいられる隠逸生活を選び，著述及び書の編纂に専念していた。陳の名は『明史』の「隠逸列伝」にも記載されており，当時は名が広く知られ，文壇でも社会でも強い影響力を持つ「山人」であった(2)。

陳継儒の『小窓幽記』は明代晩期，及び清代に盛んに作られた「清言小品」という形式の作品の一つである。「小品」は明代と清代を代表する古典文学形式であり，「小品文」とも呼ばれ，「詩」，「詞」，「曲」などの韻を踏む文体と相対して，韻を踏まない「散文」である。「小品」という名称は本来は仏教用語であり，仏教では仏経の完全訳本を「大品」と呼び，それと区別された簡略化された抄本のことを「小品」と呼んだ。明代晩期において，多くの文人は自らが創作した独特の主題・風格を持つ文章をこの仏教用語にならって「小品」と呼び，文集名にもした(3)。明代晩期と清代の文人がこの「小品」という文学を非常に熱心に創作し，大量の作品が世に出回り，結果「散文」の中の一つの文類として，当時そして後世に広く知られるようになり，明代と清代を代表する文学形式となった。

このような明代・清代の「小品」という文学の中に，さらに「清言」という独特の文学形式が存在する。「清言」の厳密な定義は存在せず，当時自らの「小品」の作品を特に「清言」（もしくはそれに類似する呼び方）と呼んだ作家も厳密な基準は持ち合わせていなかったものと思われるが，一般的には短くそして内容的に警句のようなものを「清言」としていた。「清言」の「清」は清高，清雅，清奇など，清いという意味であり，「清言」は清い言論，議論を指す。内容は清雅と思われる文人の趣味，書，画などを含む芸術品の鑑賞や，無欲であり，清高と思われる老荘思想，仏教思想に基づいた人生に関する格言などがある。当時はこの「清言」を「清言小品」，「清話」，「清語」，「言語小品」，「雑著」などとも呼んだ。「清言」の形式をとった作品の作品集の名前にも様々なものがあり，当時は

(1) 書名を『小窓幽記』とする版本と，『小窓幽紀』とする版本とがある。呉言生編注，仏縁叢書『小窓幽紀』（陝西旅游出版社，1999年）は「紀」としている。羅立剛校注，明清小品叢刊『小窓幽記』（上海古籍出版社，2000年），盧豊編注，『小窓幽記解読』（黄山書社，2002年）などは「記」としている。

(2) 陳継儒は明代の晩期における「山人」の典型であると一般に考えられている。「山人」とは，当時急増していた，政治への参加に興味を持たず隠者風な山居生活をする文人のことである。世間と断絶する隠遁生活を過ごす清貧・孤独な「隠者」とは異なり，「山人」は山中に住んではいたが朝廷にいる文人と頻繁に接触していた，優雅な趣味・文芸の才能を持つ官位のない文人を指す。

(3) 例えば朱国幀は『湧幢小品』，陳継儒は『晩香堂小品』，王思任は『文飯小品』，華淑は『閒情小品』，陳天定は『古文小品』など，「小品」と名付けられた明人文集が数多く存在する。

「清言」という名称には統一されていなかった。例えば屠隆には『娑羅館清言』，『続娑羅館清言』があり，呉従先には『小窓自紀』があり，陳継儒には『太平清話』があった。その中でも成書が早かった屠隆の『娑羅館清言』に使われたことも一因となって，現代の学術界においては明清代の「清言」もしくは「清言小品」という名称で，この形式の文学作品を指すのが一般的となっている。

明代や清代の「清言」作品の中で，日本で最も広く知られているものは『菜根譚』であり，版本の違う日本語訳注を入手することは容易である(4)。それに比べ，思想内容や文学形式の面から見てもそれに価値相当する『小窓幽記』の解釈は少ない(5)。本稿は「素」「豪」「奇」の部(6)から30条を選び，訳注を付ける。

[一]

田園有真楽，不瀟洒終為忙人；誦読有真趣，不玩味終為鄙夫；山水有真賞，不領会終為漫遊；吟咏有真得，不解脱終為套語。

◆瀟洒　（立ち居振る舞いが）鷹揚である。垢抜けしている。さっぱりしている。ここでは田舎で隠遁生活を送る際に，俗世との関わりなどへの未練がなく，無欲であり，本当に田園の暮らしを楽しめることを指す。
◆終　結局のところ，行きつくところ。
◆趣　面白み。趣。
◆玩味　玩味する。意味を深く味わう。
◆鄙夫　卑しい人。粗野な人。
◆領会　会得する。悟る。
◆吟咏　吟詠する。歌う。本来は詩を鑑賞する際または創作する際に詩の吟詠を行うが，ここでは創作時の吟詠を指し，詩の創作を意味する。
◆解脱　束縛から解放される。ここでは文学形式の束縛から脱するという意味である。
◆套語　決まり文句。ここでは，「常套」や「俗套」のように否定的な意味を持ち，新味のない陳腐な表現を意味する。

田園の暮らしには真の楽しさがある。しかし清らかな心持ちでなければ，田園生活を送ってもやはり忙しい人間のままである。読書には真の趣がある。しかし本の内容を深く味わわなければ，やはり粗野な人のままである。山水景色には真の鑑賞をする方法がある。そ

(4) 原書の著者は洪自成である。日本語の訳注は今井宇三郎訳注『菜根譚』（岩波書店，1977年），中村璋八，石川力山訳注『菜根譚』（講談社，1986年），吉田公平訳注『菜根譚』（たちばな出版，1996年）など多数ある。

(5) 『小窓幽記』の日本語訳注は他に拙稿「清言小品『小窓幽記』解読―「醒」の部から―」（千葉商大紀要第40巻第3号，2002年），「清言小品『小窓幽記』解読―「醒」・「情」・「峭」の部から―」（外国語外国文化研究第13号，2003年），「清言小品『小窓幽記』解読―「霊」の部から―」（千葉商大紀要第42巻第1号，2004年）などある。また，拙稿「張潮『幽夢影』解読」（千葉商大紀要第43巻第1号，2005年）は，同じく明代晩期の清言小品集である張潮の『幽夢影』に日本語訳注を付けたものである。

(6) 「醒」・「情」・「峭」・「霊」・「素」・「景」・「韻」・「奇」・「綺」・「豪」・「法」・「倩」の部に分れ，全書で千数百条がある。

れを会得できなければ，ただの漫遊に留まるだろう。詩や文の創作には真の収穫がある。しかし形式の縛りから抜け出さなければ，新味のない陳腐な表現しかできないだろう。

[二]

居処寄吾生，但得其地，不在高広；衣服被吾体，但順其時，不在紈綺；飲食充吾腹，但適其可，不在膏粱；燕楽修吾好，但致其誠，不在浮靡。

◆寄　頼る。預ける。
◆但　ただ。だけ。ばかり。
◆不在　～は目的ではない。～は重視しない。
◆紈綺　華美な服装。「紈」も「綺」も絹織物である。
◆膏粱　肥えた肉と上等な米。ご馳走。
◆燕楽　宴会・酒席を設け，楽しむこと。燕は宴である。古同音通用。
◆浮靡　贅沢。浪費。「浮」は空虚な，超過するという意。「靡」は豪奢，贅沢という意。

居所は我が生活を成立させる頼りである。適所を得ることができれば良い。広くて豪華であることを求めない。衣服は我が身を覆うものである。季節に合うものであれば良い。上質で華美であることは目的ではない。飲食することは満腹することが目的である。身体に適切であれば良い。美食である必要がない。友を招く宴席は仲を良くすることが目的である。誠意を尽くせば，贅を尽くす必要はない。

[三]

但看花開落，不言人是非。

◆開落　花が咲き，そして散ること。
◆是非　人様を是か非かと議論する。「是非」の本来の意味は良いことと悪いこと。
◆言　話す，言及する。

花が咲き，そして散るということのみを見よ。人様の是や非を論じるな。

[四]

世味濃，不求忙而忙自至；世味淡，不偸閑而閑自来。

◆世味濃　世間への執着が強いという意味である。世間的な名利などへの感情入りの深さ，執着の強さを味の濃淡で比喩したもの。「世味淡」は世間への執着が少ないという意味である。
◆自至　自ら来る。求めず自然に来るという意。

◆偸閑　暇を盗む。暇を見つける。時間を割く。

世間への執着が強ければ，忙しくしようとしなくても自然に忙しくなるであろう。世間への執着が少なく，心が淡泊であれば，ゆとりの時間を求めなくてもそれは自然にやって来る。

[五]

若想銭而銭来，何故不想；若愁米而米至，人固当愁。暁起依旧貧窮，夜来徒多煩悩。

◆若　もしも，もし～ならば。
◆想　考える。
◆固　もとより。もともと。元来。

もしそれを考えるだけで金銭が懐に入るとするならば，何故考えないのだろうか。もし米不足を悩めば米がやって来るとすれば，人々は悩むべきだろう。翌日の早朝に起きて貧困のままであるのに，夜になると何故か人々は無駄に悩むことが多い。

[六]

行合道義，不卜自吉；行悖道義，縦卜亦凶。人当自卜，不必問卜。

◆卜　占う
◆悖　矛盾する。相反する。逆行する。
◆縦　たとえ。よしんば。
◆当　～すべきである。
◆不必　～する必要がない。

行動が正義に合うのであれば，占いをしなくても吉である。行動が正義に反することであれば，占いをしても凶という結果が出るだろう。自分で自分の行動を観ること，それこそが占いである。よって占いに行く必要はないだろう。

[七]

逢人不説人間事，便是人間無事人。

◆便　すぐに，じきに。
◆人間　この世。人間の住む世界。現実の社会。世間。

人に逢い，世間の雑談をしなければ，ただちにこの世間と嫌な関わりのない，ゆとりの

ある人間になれる。

[八]

江山風月，本無常主，閑者便是主人。

◆江山　山河。国家が支配した領土を指すことが多いが，ここでは自然にある山水という意である。
◆常　常に変わらない。一定の。
◆主人　所有者。主宰者。主。

山水風景や風や月などは，元来特定の人に所有されるものではない。ゆとりのある者がそれらの所有者となるのである。

[九]

人在病中，百念灰冷，雖有富貴，欲享不可，反羨貧賤而健者，是故人能於無事時常作病想，一切名利之心，自然掃去。

◆百念　全ての思い・考え。「百」は多くの比喩であり，「念」は思念であり，思い・考えという意味である。
◆雖　（文頭に使われる）～と言えども。～ではあるが。けれども。
◆不可　～することができない。
◆反　逆に。
◆是故　だから。
◆能　～することができる。
◆無事時　ここでは，病気ではない，元気な時を指す。
◆掃去　一掃し，消えていく。完全に取り除く。

人間は病に冒される時，全ての意欲が失せる。富貴であっても楽しむことはできない。逆に健康である貧困な者を羨む。したがって，元気である時に病気である時のことを想像すれば，一切の名利などの考えは自然に一掃されるだろう。

[十]

当楽境而不能享者，畢竟是薄福之人；当苦境而反覚甘者，方才是真修之士。

◆当　～（場所）に居る。～に直面する。
◆畢竟　結局。ひっきょう。
◆覚　感じる。

◆方才　やっと。ようやく。「方」,「才」とも言う。

順境にいるのにそれを楽しむことが出来ない者は，順境にいられてもやはり幸の薄い人間である。逆境においても楽しさを感じられる者こそ，本当の修得が出来た人間である。

[十一]

廉所以懲貪，我果不貪，何必標一廉名，以来貪夫之側目；譲所以息争，我果不争，又何必立一譲名，以致暴客之弯弓。

◆廉　清廉。
◆所以　～を可能にするもの。～を完成させる基となるもの。
◆懲　懲りる。処罰する。また，懲戒する，懲り戒める。
◆何必　何のために～をするだろうか。どうして～する必要があるのだろうか。
◆標　しるしを付ける。表明する。表示する。
◆以　（因果関係を表す）～を理由として～する。「以来」と「以致」ともに，～をすることによって，～という結果を招くという意味である。
◆側目　横目で見る。怒りの表情を表す。「貪夫之側目」は欲望の強い人間たちに怒りの表情をされるという意味となっているが，悪いことをした人間が人々の「側目」を受けるという使い方もある。
◆息　やめる。
◆果　もし。
◆弯弓　弓を引く。ここでは攻撃の的になる，攻撃するという意味である。

清廉というのは貪婪というものを戒めるために存在するものである。もし我々は貪婪でなければ，何故自分に清廉という名を付けて，貪婪である人間に恨みを買う必要があろうか。譲というものは争いごとを鎮めるために存在するものである。もし争うつもりがないのであれば，何故わざわざ自分に譲という名を付け，争いを好む人間たちの攻撃を招く必要があろうか。

[十二]

心事無不可対人語，則夢寐倶清；行事無不可使人見，則飲食倶穏。

◆則　（二つの事柄の継起を表す）～すると。
◆夢寐　眠って夢を見ること。
◆倶　全部。すっかり。
◆使人見　人に見せる。「使」は使役動詞でさせるという意。「使人見」主動的に人を見させるということは本来の意味である。
◆行事　ことを進める。ここでは全ての事を処理する普段の行動を指す。

心の中に人に話せないものがなければ，眠って夢を見る際に完全に清らかな気持ちでいられる。行動の中に人に見せられないものがなければ，その人は食べても飲んでも穏やかな気持ちで過ごすことが出来る。

[十三]

君子不傲人以不如，不疑人以不肖。

◆傲人　他人を軽視する傲慢な態度を取ること。他人を眼下に見下すこと。「傲」はおごり高ぶる，傲慢であるという意味である。
◆以　ここでは理由・原因を表す。～のために。～なので。
◆不如　～ほどではない。（程度や能力が）及ばない。ここでは自分に及ばないという意味である。
◆疑人　人を疑う。
◆不肖　不肖。才能のないこと。愚かである。

君子は人の能力が自分に及ばないということでその人を軽視はしない。また，人の能力が劣るということでその人の行動の動機などを無闇に疑うことをしない。

[十四]

大豪傑，捨己為人；小丈夫，因人利己。

◆捨己為人　人のために自分の利益を犠牲にする。「捨己」は自分の利益，或いは命を捨てる，削ること。「為人」は人のためという意。
◆因人利己　人を利用して自分の利益をはかる。「因」は～に頼る，あるいは～を利用するという意味がある。「利己」は自分の利益をはかるという意味である。

心の大きな豪傑は，人のために我が身を削る。心の小さい人間は人を利用して，我が身を利する。

[十五]

識尽世間好人，読尽世間好書，看尽世間好山水。

◆識尽　知り尽くす。「識」は知る，認識する。動詞の後に「尽」を付け，「～し尽くす」という意味になる。「読尽」は「読み尽くす」「看尽」は「見尽くす」である。
◆好人　善人。品行方正な者。「好」は良い，立派だという意。「好書」は良い本という意味。「好山水」は立派な山水景色という意味。

この世の良い人を知り尽くしたい。この世の良い本を読み尽くしたい。この世の良い景色を見尽くしたい。

[十六]

群居閉口，独坐防心。

◆群居　群居する。群れの中にいること。
◆閉口　口を閉ざす。沈黙する。
◆防心　自分の心にある悪しき考えが湧きあがることを防ぐこと。

沢山の人と一緒に居る時には沈黙する。独りで居る時には自分の心の揺れが起きないように気を付ける。

[十七]

人生不得行胸懐，雖寿百歳，猶夭也。

◆不得　～することができない。「得」は，～することができるという意。
◆行胸懐　胸中にある理想を実践すること。また，胸中にある真の気持ちに沿って行動すること。「胸懐」には二つの意味が含まれている。ひとつは，胸中にある本当の気持ち，もうひとつは胸中にある理想，という意味である。したがって，「行胸懐」は自分の本当の気持ちに沿って素直に生きること，また胸中にある理想を達すること，二つの意味がある。「胸懐」は胸中，気概，度胸という意。「行」は実行・実践するという意味。
◆寿　長生きする。「寿百歳」は百歳まで長生きするという意。
◆猶　なお。なおかつ。未だに。
◆夭　若死にする。「寿」の反対語である。

生きているうちに自分の胸中にある目標を達成できなければ，百歳以上長生きしても短命と言える。

[十八]

面上掃開十層甲，眉目才無可憎；胸中滌去数斗塵，語言方覚有味。

◆十層甲　十層の甲羅。ここでは厚い仮面の比喩。
◆眉目　顔立ち。
◆滌　洗う。「滌去」は洗い去る，洗って取り除くという意。
◆方　やっと。この一条の後半にある「才」は「方」と同義。

顔面に付ける十層の甲羅のような厚い仮面を外した後に，ようやく顔立ちが良くなる。心の中にある幾斗もの塵を洗い流した後に発した言葉に，ようやく深い味が出る。

[十九]

点破無稽不根之論，只須冷語半言；看透陰陽顛倒之行，惟此冷眼一只。

◆点破　喝破する。
◆無稽不根　全く根拠がない。「稽」は考察する，調べるという意味である。「無稽」も「不根」も根拠がないという意味である。
◆須　～が必要である。～する必要がある。「只須」は，必要なのはそれだけであるという意味である。
◆看透　見透かす。見抜く。見破る。
◆陰陽顛倒　「陰」と「陽」を逆さまにする。正しくないことを比喩する。
◆冷眼　ここでは「冷たい目」は，主観的な感情を入れず，客観的に観察するという意味で使われている。
◆一只　「只」は目を数える量詞で，「一只」は（目が）一つという意味。

それが根拠のない話であることを指摘するには，要領を掴んだ冷たい一言で充分である。それが正義に反する行動であることを見通すには，冷たい目一瞥で充分である。

[二十]

不能用世而故為玩世，只恐遇著真英雄；不能経世而故為欺世，只好対著仮豪傑。

◆用世　才能を世のために使う，発揮するという意味である。通常官職を得ることを指す。
◆玩世　世間を玩ぶこと。世間を玩び，言行が不遜である生活態度を持つこと。
◆経世　世の中を治めること。
◆只好　～するほかない。～せざるを得ない。

世間で自分の才能を発揮することができず，世間を軽んじるような考えを持つ者は，本当の英雄に出逢って，自分を恥ずかしく感じることを恐れているだろう。経世することができず，世間を騙す者は，偽者の豪傑たちの仲間になるしかない。

[二十一]

友遍天下英傑之士，読尽人間未見之書。

◆友　友にする。「友遍」は友にし尽くす，という意味。「友尽」とも言う。「遍」はある動作の始めから終わりまでの全過程の一通りという意味である。

◆未見之書　見かけたことのない本。珍書。

この世の中の全ての英雄豪傑を友とし，この世には知られてない珍本を読み尽くしたい。

[二十二]

交友須帯三分侠気，作人要存一点素心(7)。

◆帯　携帯する。身に付けるという意味である。
◆作人　身を持すること。人間らしく生きること。「做人」とも書く。
◆存　残る。（心持ちを）持つ。
◆一点　少し。
◆素心　素直・本来の真心。

友人と付き合うには少しの豪侠な気概がなければならない。また，人として生きるにはほんの少しの真心がなければならない。

[二十三]

棲守道徳者，寂寞一時；依阿権変者，凄涼万古(8)。

◆棲守　固く守る。「棲」は停留，居住という意味である。
◆依阿　人の意見に迎合すること。また，おもねる，へつらうこと。

真理を固く守って生きる者は不遇で寂しい一時を過ごすことがある。しかし自我がなく権勢を持つ人間におもねて生きる者は，生きている間に一時的には栄達するかもしれないが，歴史に悪名が残り寂しい万世を過ごすだろう。

[二十四]

立言者，未必成千古之業，吾取其有千古之心；好客者，未必即尽四海之交，吾取其有四海之願。

◆立言　著述する。
◆取　評価する。価値がある。
◆好客　客人を迎えるのが好きである。
◆四海　世界各地。

(7)　この一条は『菜根譚』にも収録。
(8)　同上。

著述する者は必ずしも歴史に残る大作を完成して千古の大事業を達成するとは限らないが，千古の年代に貢献しようという思いは評価される。客人を迎えるのが好きな人間は必ずしも広く世界各地の友と交遊し尽くすことができるとは限らないが，世界各地の友と交遊しようとする思いは評価できる。

[二十五]

為文而欲一世之人好，吾悲其為文；為人而欲一世之人好，吾悲其為人。

◆為文　作文する。この「為」は，～をするという意。
◆欲　～したい。
◆一世之人　全世間の人間。全ての人。

世の人に好まれるためだけに文を創作しようとする者があれば，私はその人が文を創作することを悲しく思う。この世の人に好まれるためだけに人間としてこの世に生きようとする者があれば，私はその人が人間として生きることを悲しく思う。

[二十六]

胸中無三万巻書，眼中無天下奇山川，未必能文，縦能，亦無豪傑語耳。

◆未必　必ずしも～とは限らない。
◆能文　いい文章を作成できる。「能」は，～することができる。「文」はここでは動詞として使い，作文するという意味である。
◆縦　例え。よしんば。

胸中に三万ほどの本の知識と教養がなく，眼中には天下の珍しい山水景色を観た経験もないならば，名文を書くことができるとは限らない。例え文章という形ができても，豪傑たちが発するような感情こもった素晴らしい言葉は出ないだろう。

[二十七]

忍到熟処則憂患消，淡到真時則天地贅。

◆憂患　憂患。心配事と苦しみ。
◆贅　無駄である。余計である。不必要な。余分な。

忍耐を尽くし，慣れたところで憂患が失せると感じる。淡泊を極め，真の淡泊に近づいたところで天地さえ不必要であると感じる。

[二十八]

殺得人者，方能生人。有恩者，必然有怨。若使不陰不陽，随世波靡，肉菩薩出世，於世何補，此生何用。

◆若使　もし。「若」と同義。
◆不陰不陽　陰でもなく陽でもなく，自分の意見や立場を明瞭にしないことを指す。
◆随　従う，～についていく。
◆靡　なびく。
◆肉　肉体。「肉菩薩」は人間の肉体をしている菩薩を意味する。そこから派生して，ここでは常に菩薩のように慈悲深げな言動を取る人間を比喩する。
◆出世　浮世から離れるという意味でよく使われるが，ここでは世間に現れるという意味である。
◆何補　何か役に立つことがあるのだろうか。

人に嫌がられる発言ができる者こそ，人を救うことができる。人に恩を与える者は，人に恨まれることが必然である。もしも自分の意見や立場をはっきりせず，世間の流れに沿って，まるで人間の形をしている菩薩のように誰にでも慈悲があると思わせて生きていくとすれば，この世に何の貢献ができるのだろうか。そのような人生は何の役に立つのだろうか。

[二十九]

能為世必不可少之人，能為人不可及之事，則庶幾此生不虚。

◆庶幾　～に近い。ほとんど。
◆不虚　無駄ではない。「虚」は空っぽ，空虚，中身がないという意味である。「此生不虚」は，この人生は無駄ではないという意味である。「不虚此生」とも言う。

この世に不可欠な人になることができれば，あるいは人が出来ないことができるならば，この人生はおよそ無駄ではないと言えるだろう。

[三十]

処世当於熱地思冷，出世当於冷地求熱。

◆処世　世間渡り。処世。世間のことに対処する。
◆熱　狂熱。熱意。「熱地」は狂熱を持って世間と積極に関わる状況を指す。この一条の後半の「冷地」は隠遁生活やそのような生活態度で世間との関わりが薄い状況を指す。「冷」は冷めた，冷静という意味である。

◆思　考える。思いをめぐらす。
◆出世　浮世を離れる。俗世を超越する。
◆於　～に於いて。ここでは場所を表す。～に，～でという意。

熱をいれて世間と関わる際には，時には感情を抑え冷静となる必要がある。世間との関わりが薄い隠遁や田舎生活をする際には，時には感情を入れ，熱い気持ちになる必要がある。

参考文献

羅立剛校注，『小窓幽記（外二種）』（明清小品叢刊），上海古籍出版社，2000年。
呉言生編注，『小窓幽紀』（仏縁叢書），陝西旅游出版社，1999年。
盧豊編注，『小窓幽記解読』，黄山書社，2002年。
洪自誠，『菜根談』，岳麓書社，1991年。
今井宇三郎訳注，『菜根譚』，岩波書店，1977年。
中村璋八，石川力山訳注，『菜根譚』，講談社，1986年。
陳継儒，『眉公雑著』（1～4），偉文図書公司，1977年。
胡紹棠編注，『陳眉公小品』（明人小品十家），偉文図書公司，1977年。
呉言生編注，『小窓自紀』，陝西旅游出版社，1999年。
程不識編注，『明清清言小品』，湖北辞書出版社，1993年。
台湾中央図書館編，『明人伝記資料索引』，中華書局，1987年。
陳万益，『晩明小品与明季文人生活』，大安出版社，1988年。
曹淑娟，『晩明性霊小品研究』，文津出版社，1988年。
呉承学，『晩明小品研究』，江蘇古籍出版社，1998年。
謝氷瑩等編訳，『新訳四書読本』，三民書局，1987年。
陳鼓応註訳，『荘子今注今訳（上・中・下）』，中華書局，1983年。
Kuo, Lili. *On Aesthetic Issues Surrounding the Late Ming Landscape Essay*, MI: UMI, 2001.
羅筠筠，『霊与趣的意境—晩明小品文美学研究』，社会科学文献出版社，2001年。
郭莉莉，「清言小品『小窓幽記』解読—「醒」の部から—」，『千葉商大紀要』第40巻第3号，千葉商科大学国府台学会，2002年。
郭莉莉，「清言小品『小窓幽記』解読—「醒」・「情」・「峭」の部から—」，『外国語外国文化研究』第13号，国士舘大学外国語外国文化研究会，2003年。
郭莉莉，「先秦時代の儒家と道家の言語に対する見方について—言語と意の関係から—」第41巻第1・2合併号，千葉商科大学国府台学会，2003年。
郭莉莉，「清言小品『小窓幽記』解読—「霊」の部から—」，『千葉商大紀要』第42巻第1号，千葉商科大学国府台学会，2004年。
郭莉莉，「儒家思想と道家思想に見られる文芸への肯定的な見解と否定的な見解に関する考察，第14号，国士舘大学外国語外国文化研究会，2004年。
郭莉莉，「明代晩期の清言小品と真の追求ということについて」，『外国語教育論集』第27

号，筑波大学外国語センター，2005年。
郭莉莉，「張潮『幽夢影』解読」，『千葉商大紀要』第43巻第１号，千葉商科大学国府台学会，2005年。

〔抄　録〕

人々を警(いまし)めるための格言が収録された『小窓幽記』は，陳継儒（1558～1639）によって編纂され，出版当時，文人ならびに一般の人々に歓迎され好評を博した。『小窓幽記』は格言を綴る形式を用いた，晩明の「清言」作品である。「清言」という形式の著作は南北朝の『世説新語』から始まり，唐代と宋代には禅僧，儒者の語録作品が数多く存在する。明代の末期になると，性霊の表現を追求する文学風潮の影響で，独特かつ文学価値の高い「清言」作品が続出した。

『小窓幽記』の他に，陳継儒の「清言」作品には『岩棲幽事』，『安得長者言』，『太平清話』，『狂夫之言』などがあり，同じ「清言」の作者に大きな影響を与えた。

明代や清代の「清言」作品の中で一番広く知られているものは『菜根譚』であり，版本の違う日本語訳注を入手することは容易である。それに比べ，思想内容や文学形式の面から見てもそれに価値相当する『小窓幽記』の解釈は少ない。本稿は「素」「豪」「奇」の部から30条を選び，訳注を付ける。